「第８回日本顕微鏡歯科学会学術大会　事後報告」

２０１１年１１月２６（土），２７日（日）の二日間に渡り「第８回日本顕微鏡歯科学会学術大会」が日本歯科大学富士見ホールで開催された。
本大会は４月に予定されていたが、３月１１日に発生した東日本大震災の影響で日程、会場を新たにしての開催となった。

顕微鏡歯科学会の会員数の急増、そして顕微鏡歯科治療の発展に応え、今大会から日程を土曜日午後からの１日半へ拡大された。

本大会はスローガンを“Get Visual and Open Your Dentistry !”として顕微鏡歯科治療を静止画ではなく映像で公開することにより、その実際をつまびらかにして検討することをテーマにした。このスローガンに沿うために、各演者には映像を中心にした発表への協力をしていただいた。また、ハイビジョン液晶プロジェクターを使用することでスクリーン上に投影する映像の質の向上に努め、より精細な治療映像を投影できるようにした。

【第一日目】

第一日目は学会長の辻本恭久先生の挨拶、大会長による基調講演に続いて、ペリオワークショップが途中休憩を挟んで２時間行われた。これは山梨県開業の秋山勝彦先生の歯周治療にスポットを当て、そのオリジナリティー溢れる手技の実際をハイビジョン顕微鏡映像に加えて、手術の外回りの映像も披露していただいた。秋山先生の熱のこもった講演と精細な映像、座長の長尾大輔先生の進行により、あたかも参加者全員がチェアーサイドでライブオペを見学しながら解説を受けているように会場は超満員の参加者の興奮のルツボと化した。

ペリオセッション講師である秋山勝彦先生に感謝状が手渡された

休憩時間にはホールに隣接した企業展示会場で新発売の顕微鏡や専用器材などが数多く展示され多くの参加者で賑わっていた。

同日最後は本学会前副会長の中川寛一先生による「顕微鏡歯科と MID」と題して教育講演が行われた。日本に顕微鏡歯科治療を紹介し、発足時から長年会長として本学会を牽引して来られた経験を踏まえ、専門の根管治療に顕微鏡がもたらした変革をまとめていただいた。

講演終了後は会場をグランドパレスホテルに移して 130 名以上の参加者により懇親会が開催された。大会長、学会長、各演者の挨拶にプロマジシャンのアトラクションも挟んで大いに盛り上がり、会員同士の親睦を深める楽しい一時となった。

グランドパレスホテルで開催された懇親会

【第二日目】

二日目は一般演題発表から始まった。顕微鏡歯科治療をスムーズに行うための専用インスツルメントの開発や歯周治療、CR 修復、外科治療等各分野での顕微鏡治療の実際が動画を交えて報告され、参加者から多くの質問があり活発な論議が行われた。特に望月一彦先生の発表では、到底不可能と思われるほどの露出根面に対して、一回のみの被覆術によりほぼ完璧な審美性が得られた症例が披露され、会場からは感嘆の声が上がっていた。

一般演題発表後には、衛生士シンポジウムとテーブルクリニックが会場を別にして開催された。富士見ホールで開催された衛生士シンポジウムは本会事務局長の吉田格先生をコーディネーターに開業歯科医院に勤務する立場から戸田奈緒美、大野真美両先生、大学病院に勤務する立場から永田恵美子先生にパネラーとして発表していただいた。
世界的に見ても歯科衛生士が顕微鏡を使える環境は非常に希であり、少ない情報の中から各先生が工夫しながら治療の中に顕微鏡を取り入れ、使いこなしている様子が伝わり非常に興味深いシンポジウムとなった。

衛生士シンポジウムのパネラーとのディスカッション

カガミ歯科の大野先生は顕微鏡治療未経験のスタッフと共に毎日休憩時間に相互実習を続けた、とのエピソードを披露し、医院一丸となって顕微鏡治療に取り組む姿勢に参加者全員が感銘を受けた。

衛生士シンポジウムと並行して　一階メモリアルホールではテーブルクリニックが開催された。演者との距離が近いテーブルクリニックはコミュニケーションが密になる。顕微鏡治療の質を向上させるための Tips や症例報告が各テーブルで披露され、テーブルを囲んだ聴衆との間で熱心なディスカッションが繰り広げられた。
中澤正博先生は歯周再生療法について独創的な治療法を報告し多くの聴衆を集めていた。

昼食時間には佐藤暢也先生（白水貿易提供）、千栄寿先生（モリタ提供）、小塚昌宏先生（ペントロン提供）によるランチョンセミナーも開催され美味しいお弁当と共に素晴らしい講演が行われた。

テーブルクリニックの様子

午後は医療ジャーナリストの伊藤隼也氏を講師に招いて時事講演が行われた。広く医療一般から歯科医療にも精通する伊藤氏がなぜ顕微鏡歯科医療に注目し普及活動を続けるのかをかつて日本の心臓外科医療の現場で起こしたパラダイムシフトを例に判りやすく講演していただいた。「医療はお互いに助け合う、という人間としての本質的なところに触れる領域だからこそ自分の情熱を傾ける」というコメントには一医療人として、心強いエールを貰ったような気持ちだった。

二日目最後には「マイクロスコープ視野下における垂直歯根破折歯の新規保存療法」と題して天川丹先生に特別講演をして頂いた。抜歯に直結する垂直歯根破折に対して残存歯質を可及的に薄くスクープアウトしてマルチファイバーポストで強化する、という旧来の考え方からは１８０度方向転換した治療法が長期経過症例と共に紹介された。
根管治療の新しい選択肢の出現に聴衆一同が驚嘆し、顕微鏡歯科治療の可能性の大きさに今更ながらに感心したのであった。

特別講演をする天川丹先生

全ての学術講演、発表が終了後に総会を経て、二つの表彰式が行われた。
まず長年の学会発展に貢献されたことに敬意を表して中川寛一本学会前会長に学会賞が辻本現会長から記念の楯と共に手渡された。
もう一つ、本学会の学術大会では初めてとなった聴衆の投票形式による大会長賞には「歯周病治療におけるデブライドメントの重要性」と題して一般演題発表した長尾大輔先生が最多得票で選ばれた。登壇した長尾先生は大会長から賞状と記念品が会場からの大きな拍手と共に手渡され、感動の表彰式をもって二日間に渡り開催された本大会は終了した。

学会賞、大会長賞の授与

第８回学術大会は動画を中心にした発表にすることで治療の詳細を伝えられる、という顕微鏡治療ならではのメリットを生かし、顕微鏡歯科治療の盛り上がりと相まって４６０名以上の参加者を得て過去最大の大会となった。

超満員の会場